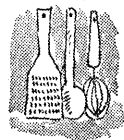


「それぞれの子どもらしさを求めて」より (一)

## 名古屋市立大高幼稚園



かいじゅうだよ

たか子・えつお・まさきの三人が、製作コーナーで紙を使って何かを作っている。たか子は、四角い紙のまわりを細く切っている、教師が、

「何が、できるのかな？」

という、

「かいじゅうだ」

という。えつおは、何か自分の好きな形に切りぬいて、やはりかいじゅうだと、教師におそいかかったりする。少しもそれらしくないのだけれど、それでも本人は、ほんとうに満足のいくかいじゅうを作ったつもりでいる。教師が、

「色をぬってみるといいね」

という、色をぬってくる。もっと本物に近づいたような気がする

らしく、教師が外にいたら呼んで見せてくれた。まさきはV3にするから棒がいるという。以前、年長組が作っているのを見たのである。工作棒を与えると、ペープサートのようなものを作る。紙を切り、そのまん中に丸をかけたぐらいいのものであったが、それをだいいじそうに家へもって帰っていった。

◇ ◇ ◇

おとなから見ると、ごみのように感じられる作品の中に、イメージが秘められ、その過程に喜びがみちあふれている。

(四歳児 四月二十三日)

仲なおりましたわよ、ね！

ままごと(きり子を中心となっている)にはいりたいけれど、きのうきり子とけんかをしているので、なんとなくはいりにくそうにしているはつ子、友だちと遊べないうめ子のふたりを教師の

子どもとしてままごとの場へつれていった。しばらくいっしょに遊び

「この子たちふたりはまたここで遊びたいようだからあずかってくください。わたしはちょっと遠くまでおつかいに出かけなくてはいけないのでおねがいます。」

と行ってふたりを残して出た。ふたりはそのままとけこんで遊んでいた。はつ子ときり子が

「わたしたちもう仲なおりましたわよ、ねえ—」

と顔を見合せて笑っている。

◇ ◇

そのことばを聞き、はつ子ときり子のふたりが、楽しそうに遊んでいる姿をみて、教師もしあわせな気持ちにひたる。うめ子もござの上にちょこんとすわり、ままごにはいっているといったよろこびが表情に出ている。(四歳児 五月十一日)

ほくもままごとあそびがしたいの

ふみお・まさとたちは、ままごとコーナーからままごとあそびの道具・人形などにいたるまで、全部積み木のコーナーに入れて遊び始めた。女兒のグループは不満そうであったが、男児もいままでおりあれば使いたいと思っていたのではないかと思われたの

で「きょうは男の子に貸してあげてね。いつも女の子のままごとを見て使いたいと思っていたんだよ」と話すと、きわ子が、

「いいわよ、男の子も使いたんだね」

といてくれた。くしゃくしゃにままごとの道具を入れ足のふみ場がないような状態なので、教師は積み木を棚にしてままごと道具を整理してやった。人形もふとも放りばなしであったが、いつの間にかうさぎやねこをきちんとふとんの中に入れてねかせてあった。

「先生、先生、ジュースができたからきてください」

とか

「遊びにきてもいいよ」

とかいって、すぐく教師に働きかけてきた。

◇ ◇

積み木あそびや砂遊びなどをしているときは、それほど教師に働きかけてこなかったのであるが、ままごと遊びでは、教師からも入っていきやすいふんい気があり、子どもからみても教師に親しみやすいふんい気があるということがいえるような気がした。環境整備は一日の遊びの事前のみにあるのではなく、子どもの活動している中でも常におこなわれなければならない。たとえば、子どもの活動に応じて場を作ったり、広げたり片

付けたりなどして、子どもの活動をよりスムーズに楽しくしてやるのが教師の役割であると考える。

特に四歳児では教師のきめ細い心くばりが大切である。

(四歳児 五月十六日)

こんどは あなたのばんよ

ままごと道具を全部男児にゆずった女児は、ままごとコーナーの中にいすを運び入れ、女児六名のメンバーでボールあそびを始めた。順番にひとりずつ前にでて、ボールを二・三回ついでには席にもどるという遊びである。ボールをもってははじめのおじぎをする、見ている人は手をたたく。ボールをつき終わると見ていた人はまた手をたたき、ボールをついた子どもはひとりずつ握手をしてまわり、自分の席にもどる。きよ子が

「○○ちゃん」

と名前をよぶとよばれた子どもが次にボールをつく。まだ入園当初で名前がよくわからなくてきよ子がとまどうと、次の順番になっている子どもがきよ子に自分の名前を教えよんでもらう。きよ子は自分の番になるとだれかに、

「きよ子といいなあ」と

といわせ、自分がボールをつくわけである。この遊びがずいぶん

長い時間つづいた。

◇ ◇ ◇

きよ子のリーダーシップによるが、入園当初の四歳児の活動としてはできすぎているように思われた。遊びながら遊び方をしつていくその過程がよく感じられた。(四歳児 五月十六日)

せんせい おはようっていってね

園外保育のバスの中で、すみ子とちよ子がならんですわり、その横に教師がすわった。ちよ子が、

「わたしとすみ子ちゃんと、友だちになったの。朝、すみ子ちゃんに「おはよう」ていうもんね」

という。

「ああそう、げんきにいえるものね。友だちになってよかったね」

「わたし、先生にも、「おはよう」というよ。先生もいってね」という。

◇ ◇ ◇

入園当初から最近まで、朝、母親にまつわりつき、離れぎわがわるかったので、ちよ子との朝の出合いは、非常に気をつかっていた。毎朝、

「おはよう」

と、教師から明るく、ことばをかけてきたのであるが、ちよ子には聞えていなかったのかも知れないと思った。この二、三日、教師に対して話しかけるようになり、明るさがでてきた。しかし、心が通じ合っていなければ本当の出合いとはいえないと、痛感させられた。安心感が生じてくると、気持ちがほぐれてくる。そして、他人のいってくることが、聞けるようになり、しだいに、いらぬ緊張感をもたずに、他人とかかわれるようになってくるのだと思う。

(四歳児 五月十八日)

せんせい こんにちは

製作のコーナーでひな子が、きょうもいっしょうけんめいに何かを作っていた。絵をかいたり、紙を小さく切って楽しんでることが多いが、男児が盛に円すいの筒をつくっているのを見て、自分も同じものを作ろうと思ったのであろうか。大きくはないが、いくつも作ってそれを重ねてみたりして見せにきた。

「うずまきみたいにぐるぐるまわっているね」

という受けとめ方しかできなかったのだが、ひな子は別にそれに対して反応はしなかった。つぎは指にかぶせる帽子のようなものを作った。はじめて製作をしたときにこれと同じようなものを作

っていたのだが、きょうはそれをもって教師が他の子どもと話をしているうしろから甘えるように

「せんせい、こんにちは」

といっ指を動かして話しかけてきた。

◇ ◇ ◇

教師も円すいの筒を作り顔をかいて指にはめ、いろいろなことを話しかけていった。ひな子も教師の話しかけに対していつもよりずいぶんよく話をしてくれた。こんなに会話がスムーズにできたことはなかったが、このことによりひな子に近づけたのではないかと思う。

(四歳児 五月二十一日)

(つづく)

(今月から、名古屋市立大高幼稚園が、創立十周年を記念してまとめた実践記録集「それぞれの子どもらしさを求めて」より、転載させていただきます)